

第一章 人生と運命

皆さんこんにちは。本日はご多用の中、このように大勢の皆さんにお越しをいただきまして誠にありがとうございます。

また、平素は種々ご支援をいただきまして、厚くお礼申し上げる次第でございます。お陰様で三期目の折り返しを過ぎましたが、私は去る四月一日から市議会自由民主党議員会の幹事長という大役を仰せつかりました。

これも偏に皆様のお力添えの賜であり、この場をお借りして重ねて厚くお礼を申し上げます。

今回の講演は、議員活動十周年記念の一環として開催いただいたものですが、去る三月七日の晴峰会（私を支援する女性の会）の総会後に講演した「人生と運命」をベースとしてお話させていただきたいと思います。

私自身、皆様にご満足いただける内容だったとは思っておりませんが、「もう一度聴かせて欲しい」という強い要望に押されて、懲りずにお話させていただくこととなりました。それにしても、私より人生経験の豊富な、先達に大勢おいでをいただいている中で、「人生と運命」を話すということは、大変僭越なことで恐縮なんですけど、きょうは、三上洋右の「人生観」と「運命論」を話すということでお許しをいただきたいと存じます。どうぞよろしく願い申し上げます。

それでは「人生と運命」についてお話をさせていただきます。

「人生」というのは皆さんご承知のように「人が一生、生きている間をいい、人間がこの世に生きること」を人生といいます。

そして、「運命」とは、「人間の行動や、運、不運を左右する力」あるいは大辞林を引きますと、「超自然的な力に支配されて、人の上に訪れるめぐり合わせ」「天命によって定められた人の運」と書かれております。

一方、似た言葉に「宿命」という言葉がありますが、これは「生まれる前から定められていて、どうにもならない運命」これを宿命といいます。

例えば、親兄弟や先祖を変えたいと思ってもできないように、「絶対動かすことのできない運命」これを「宿命」というのであります。

では、「宿命」は変えられないとして、「運命」は変えることができるのでしょうか。私、三上洋右は何の変哲もない、取りたてて誇るものがないのに、どうして札幌市議会議員になることができたのか？ 勿論、皆さんのご支援があつてのことです。それにしても、青森県の片田舎から出てきた、中学校しか卒業していない者がここまで来ることができたのか。普通なら考えられないことでもあります。

私は以前に「この指とまれ」という本を出しましたが、そのなかに四十才になるまでの大まかなことを書いていますし、個人的に何人かの人に、私の生い立ちについてお話ししておりますが、こんなに大勢の前でお話するのは初めてのことです。何せ自慢になる話でもありませんし、自分から進んで話したいことでもありません。

でも、本日は「人生と運命」というテーマでお話することになったものですから、自分を俎上に乗せ、恥を忍んで語ることにしたのであります。

私の出生地は青森県北津軽郡中里町大字今泉というところにあります。吉幾三と太宰治の生まれた金木町の隣で、「津軽平野」の唄で有名なストーブ列車の、終着駅中里から北へ十キロぐらい離れた、後背地が山林に囲まれた地区で、日本海につながる十三湖が町のはずれにあるところです。

中里町は、今では道路も整備されたことから交通面でも便利になりましたが、昔は山林の伐採、炭焼きなどの山仕事や少しばかりの田畑の耕作をするくらいで、いい働き口と言えば町役場、農協、郵便局などで、あとは開墾の手伝いや遠洋漁業とか土木・建築工事の出稼ぎでもしなければ生活のできない貧しいところでした。

吉田松陰が幕末にこの地を訪れ、湖畔から津軽富士（岩木山）を眺め、その景色を絶賛しただけあつて住むだけなら申し分のないところです。

私は昭和二十年十一月十日午前七時二十五分（頃）、妾腹の子という大きな「宿命」を背負って中里町に生まれました。

父は奈良喜一郎、母は三上カセと言ひ、私は母親の姓を名乗っております。

父の家は私の生まれたところからさらに十キロほど北の、北津軽郡市浦村大字太田（元は相内村）という山村で、そこで、酒、たばこ、塩、切手など日用雑貨の小売店、製材所、精米所を経営する他、養豚を行い、山林、田畑を所有する、村でも有数の資産家で、昔は庄屋のような家柄であったようです。父は私が中学校の頃には村会議員をしていて二期務めております。ちなみに、市浦村は北海道の元副知事三上顕一郎さんの出身地でもあります。

実は、私には父親の違う十六才上の兄と、十三才上の姉がおります。兄は四年前病気で亡くなり、姉は現在、中里町から二つ隣の北津軽郡小泊村というところに住んでおります。

母が三十才の時だそうですが、母と兄、姉の二人の子供を残し、父親は北海道の鹿追へ出稼ぎに行ったまま帰らず、その後、昭和十九年に亡くなったと聞いております。幼な子二人を抱え、途方にくれたお袋は、大変な辛酸の果てに、村に二軒あった割烹旅館の一つ、蛭名旅館で、中居として働くことになります。

そして、客であり、旅館の主人の友人でもあった奈良喜一郎と知り合い、私が生まれたということでもあります。

父、奈良喜一郎は本妻との間に二人の娘がいる妻帯者ですから、私は妾腹の子ということになります。今でいう不倫の子であります。

私は不倫の子という「宿命」を背負って、人生のスタートを切ったのであります。

後々、自分が結婚するまで、このことが心の重荷となり今でいうトラウマ状態に時々、陥ることもありました。

それでも私の小さい頃は両親が仲が良く、私を高校、大学に行かせて、「末は博士か大臣か」とまでいかないけれど、将来を夢見る一見、幸福そうな生活が続いたようで

すが、そんな関係が長続きする訳がありません。

もともと、親父は本宅での家庭生活がうまくいっていなかったために、お袋との関係ができたようですが、そのうちに親父には別の女性ができ、それに嫉妬したお袋とは次第に疎遠になって行きます。

私達母子は親父が出してくれた小さな日用雑貨店の収入と、お袋が農繁期の出面取りで生計を立てることになるのですが、当然のことに暮しは楽ではありませんでした。そんな生活の中で、私が何よりも悔しかったのは周りの子供たちから「父無しっ子」「妾の子」とバカにされたことで、一日として親父と暮した記憶のない私には、いじめられたことだけが記憶に残っております。今のいじめやバッシングなんて問題にならないくらいひどいもので、悔しい嫌な思いの日々でありました。

ある時、バカにされたことが原因でケンカになって、相手に殴られ顔を腫らしてワーワー泣いて帰ったところ、お袋に言われたのが、「殴った人は眠れないが、殴られた方は眠れるんだから決して相手を殴ったら駄目だ。」という言葉でした。私にしてみれば、そんなバカなことがあるか。「殴られた方が痛くて眠れないに決まっているじゃないか。」と思ったのですが、後で考えてみるに「自分に疚しいことがあれば罪悪感に咎められるんだ。」ということをお袋に教えたかったのだと思います。

「三つ子の魂百までも」といいますが、この時のお袋の説教が今でも記憶に残っており、市議会議員となっても、人にうしろ指差されないよう心懸ける、下地になっているんだと自分でも思っております。

小さい時から普通の家庭では経験できないことが続きましたから、随分打たれ強く、我慢強い人間になれたんでないかと思っております。

私はこれまでの人生で「衝撃」を受けたことが三回あります。

一つは、たまたま家に遊びに来ていたお袋の友人二、三人が、「生んで良かったでね。あの時墮さなくて良かったでは、こうして役にたづもんな。」と津軽弁で話す言葉にでした。お袋が喘息で苦しんでいたため、家では、小学校一年のころからご飯支度は

私の仕事でありましたが、そのご飯支度をしていた折になにげなく耳にした言葉です。
私は愕然としました。

「自分は望まれて生を為したのではない。流されるとか、墮ろすというのはもしかしたら、この世に生をうけられなかったということなのでは？ 自分は、この世に生まれていなかったのかも知れないんだ。」

そう思うと、子供ながらも言い知れぬショックでした。

もう一つは、親父が私を市浦の本宅へ連れていこうとしたときの事です。

それは私が五才くらいの時ですが、親父は私が随分可愛かったようで、村にあるもう一軒の旅館の女将に命じて私を連れ出しました。

その旅館には親父が待っており、私を抱いて「おまえは俺の跡継だ、今日は家に連れて帰るからな。」と言います。

親父のところには二人の娘がいて、長女に婿養子を取っていたんですが、男の子の私に跡を継がせたかったみたいです。大人とは誠に身勝手なものであります。

私は母親の方がいいですから子供心にも、これは大変なことになると思い、その場からどうして逃げ出すか、そればかり考え必死でした。そこで一計を案じ、女将さんに「うんこしたいっ」と言ってトイレに行ったのですが、女将さんは私に逃げられたら親父に怒られるものですから外で見張っております。それで困ってしまい、とっさに「紙がないっ」と嘘をついたところ、真に受けた女将さんがチリ紙を取りに行っている間に、私は冬の夜道を裸足で泣きながら家に走り、お袋の懷に飛び込んだのを覚えております。あの時はもう必死でした。

幼いころから臨機応変といいますか、我ながらよく機転がきいたと思います。

あんな経験は私ぐらいだと思いますが、それにしても子供の私にとっては大変なショックで二度としたくない体験であります。

小さい時にそんな体験をしましたから、大人や、世間に向けての処世術には長けており、村の人からは「利発な子供だ」とよく言われておりました。

私は小学生の頃は唱歌が得意で、NHKや民放のラジオ音楽番組には、学校の推薦で機会ある毎に出場しました。それでスポンサーから、サンプルのビタミン剤や賞品の「トンボ鉛筆」などをたくさん貰ったものです。

喘息持ちのお袋の血を引いたせいかわ私も小児喘息で、温泉治療が効くというんでよく、「大鰐温泉」とか「酸か湯温泉」などの湯治場に行きましたが、そこでも歌を歌って、ゆで卵や小遣いを貰い、「将来は歌手になったら」と煽てられて子供心にも本気で考えたこともありました。

もしかして、私が上京して歌手になっていたら、吉幾三とは逆になっていたかも分りませんね。半分冗談で半分は本気で、歌手か、「釣りバカ日誌」のハマちゃんを演ずる西田敏行のような俳優になろうと考えたことがあります。少年時代の淡い夢でした。私には自慢出来る過去は何もないのですが、皆さんに一つだけお話できることがあります。

それは作文なんです。小学校四年生のときですが、電電公社（今のNTT）の「こんな時電話があったら」というテーマの、作文コンクールに応募して入賞したことです。内容はお袋の喘息のことを書いたのですが、現在は副作用があるということで販売されておられません。当時、村に医者がないため喘息の特効薬だった「エフェドリン」の錠剤と注射液を、家に常備していました。普段は薬だけで済むんですが、発作が始まるとお袋は息使いが荒くなり、体を縦にして苦しみ、端で見えてもオロオロするだけでどうすることもできません。

そんな時には決まって近所の看護婦経験者か、軍隊での衛生兵経験者の人に頼んで「エフェドリン」を注射して貰い、発作を鎮めるのです。完全に医師法違反ですが、昔は皆そうして助け合ったものでした。「エフェドリン」がある時はそれで発作も治まるんですが、うっかり切らしてしまったときは大変です。

四キロ離れた役場のある地域でなければ薬屋はなく、津軽特有の西風の強い冬道は地吹雪が物凄く、小学生の子供では強風に飛ばされそうになります。そんな時でもお袋

に万一のことがあったら私はひとりぼっちになってしまうので「アッチャ死ぬんでないっ」（アッチャとは津軽弁でお母さんという意味ですが）そう叫びながら泣いて薬屋さんに辿り着き、熱いお茶を飲ませて貰い体を温めてから、薬屋さんのご主人の励ましの言葉を受け、再びもと来た吹雪の道に戻るのです。

「こんな時電話があったら隣村から家路に帰る村人に頼めるのに……。」確かそんな内容の作文でしたが、入賞して理科の教材に電話機二台を貰って校長と担任の先生にえらく褒められ、とても嬉しかったのが数少ない私の自慢話です。当時の内潟村（中里町に合併する前の村）の今泉地区には電話が小学校に一台しかなかった昭和三十年頃のことです。

以来、褒められたのが非常に嬉しかったので国語が特に好きになり、後に中学校や青年団での弁論活動に没頭するきっかけにもなりました。

私は母子家庭で育ったせいか、子供のくせに周りに対して過敏で、自意識の強い子供だったと思います。

村外れの十三湖の辺りに「吉田松陰の碑」が建っているのですが、その、石碑の側によく一人で行っては寝転んで、青空に浮かぶ白い雲や、津軽富士と呼ばれる岩木山を眺めながら「俺は他の人とは違うんだ、偉くなってきってお袋を幸せにしてやるんだ。」そう繰り返し繰り返し、自分に言い聞かせるように呟くんです。すると、何となく眼の前が明るくなるような気がしました。

でも、来る日も来る日もお袋と二人だけの生活で、何も変わることはありません。しかし、何の現実味もないんだけど、「お袋を幸せにしてあげられるのでは」とそんな風に思えたのを覚えております。

繁盛しない日用雑貨店だけでは生計が成り立たず、喘息の発作がでない時は、病弱の身を押して農家の出面取りで働くお袋を、とにかく楽にしてやりたいと思う気持ちで一杯でした。「虹の根元を掘ったら宝物がある」という言葉を信じて、虹を追いかけたこともある母親思いの子供でした。これは母子家庭特有のものかも知れませんが、

お袋に幸せを、いい思いをさせてやりたいといつも思っていました。

私は自分で言うのも変ですが、情に厚い人間だと思っています。それもこんな家庭環境で育ったことによるのかも知れません。

お袋は無学でしたが、躰には厳しい人でした。出面取りで農家の手伝いに出掛ける時は、農繁期ですから学校も休みになり、私が店番に立つんですが、ある時、店の売り上げを百円でしたか？くすねたのがバレて、ひどい罰を受けました。寒い夜にパンツ一枚で土間に座らされ、焼け火ばしを付けられそうになって叱られた時は、お袋は鬼のように怖い人だと思いました。お袋は普段は優しく、私を溺愛しましたが、反面、悪いことをした時は容赦しない人でした。

人間、怖い人がいないと駄目ですね。私が今こうして市議会議員になって務まるのも、皆さんのような力強い支持者がいるからですが、同時に、皆さんは私にとってとても怖い存在なのであります。どうしてかと言いますと、私に万一、何か不正があったり、間違いがあったら、皆さんの信頼を一気に失うことになるからです。信頼を失った時は一卷の終わりです。だから変なことはできません。怖い人がいることはいいことなんです。

さて、そんな境遇での貧乏生活でしたから年とともに、大学はおろか高校へも進学できないことが子供心にも分ってきました。今でこそ直ぐ近くに高校が建っていますが、当時は近くに高校がなかったため、下宿しなければ行けない不便な地域だったのです。下宿するということは病弱なお袋を一人置いて行くことになり、母子家庭という他人には分らない、情愛の絆で結ばれた私にはできない相談でした。

ですから高校へ進学するという目標を失った私は「将来、偉くなってお袋を幸せにするんだ」ということを、考えていた割には勉強に身が入りませんでした。

それでも私は中学校に進んでからも、作文のせいなのか国語と社会だけは好きで得意でした。勉強しなくてもテストは両方とも八十点以上は取っていましたが、数学だけは中学一年の時の先生が嫌いで、勉強もしないもんですから成績も下ってしまいまし

た。

ところが中学二年の時に国語と数学が同じ先生で、「国語や社会が優秀なのにどうして数学ができないんだ。数学は基本を覚えれば、国語より易しいんだぞ」と言われ、頑張ったところ先生の教えもあって三学期には、成績が上がっていました。

その時の教科担任が吉田先生で、つい二、三年前まで青森県の板柳町の教育長を務めた立派な方ですが、指導者によって子供も随分変わるもんです。

全部教師のせいにはできませんが、先生の教え方によってやる気が起きたり、自信がつくことがあるということがその時よく分りました。

今、学校教育が問題となっております。家庭教育も勿論大切ですが、教師はその名の通り教えるプロでなければいけないと思います。

高校へ進学できなかった私は、中学校時代が唯一の学生生活ですが、野球部の補欠の補欠だったくらい体育が苦手だった分、弁論活動で充実感を味わっていました。

全校の弁論大会では、一年生のときから三年生まで、常に一、二位で、石狩管内ぐらゐの広さの北津軽郡の大会で優勝したこともあります。

弁論が得意といっても端から見れば、ただ喋ればいって思うような感覚の人もいるみたいですが、決してそんな甘い簡単なものではありません。

考え方や論旨がまずしっかりしなければなりませんし、聴く人に納得して貰い、共感を得なければなりません。

要するに説得力が無ければ駄目なんです。

だから森前総理のように喋ればいってことにはならないんです。相手がどう思うか、ここが大事で肝心なところなんです。

弁論をやるということは、考え方が緻密で、問題の捉え方や洞察力に長けていることが必要であり、且つ、繊細さも要求されるのであります。

私の場合、そんな資質が少しはあったのではとっております。それでいてアッと驚く「大胆さ」も備えておりました。

「大胆さ」といえば思い出すことがあります。

今考えると、よくあんなことが出来たもんだと自分でも思うんですが、中学校の修学旅行に行きたいということで、大変なことをやってしまいました。

私の家は日用雑貨の商いと、母親の出面取りの収入で成り立っていたので、修学旅行へ行く余裕などないことは私自身よく分っており、お袋に修学旅行へ行きたいとは言えませんでした。

何がなんでも行きたいと言えば旅費は出してくれたと思うんですが、後々の生活に困るのは目に見えておりました。とにかくお袋を困らせたくないから、口では行かなくともいいと強がりをしていました。

しかし、本当のところは絶対に行きたいのであります。

それで私は一大決心をしました。何をしたかといいますと、同級生四人を連れて、峠道を自転車で越え、親父のやっている雑貨店から、婿養子の制止を振り切って、清酒十本入りの木箱を五ケース持ち出し、私の家の前の旅館に頼んで買って貰ったのです。そして売上金を旅費にして、東京への修学旅行に行ったんですが……。それを知ったお袋は複雑で、逆に大変な心配をかけてしまいました。

しかし、さきほどもお話しましたが、親父は五才の私を連れ出し、「お前は俺の跡継いだ」と言っていたのですから、店の物は当然、私の物だという理屈が成り立つ訳で、全然、罪悪感がないのです。今考えると無茶苦茶な話なんですが、何とも大胆なことをやったもんだと自分でも感心している次第です。

旅館の主人が親父の「駄賃付け」という、馬を使った運送業仲間で義兄弟の盃を交わした関係もあって、持ち出した清酒も全部買って貰えたんですが、それにしてもよくあんなことができたものです。ビックリ仰天しながらも「末が楽しみだ」なんて旅館の主人に言われ、こっちが照れたくらいでした。

家には私が小さい頃から親父の友人とか、村の名士と言われる人達がたくさん出入りしていました。校長先生や政治家、お医者さん、中には山師のような人もいて昼日中

から酒を飲んで天下国家を論じているんですが、私は小さい時からそんな大人の顔を見て育ちましたから、誰が嘘をついて誰がホラを吹いているか、見分ける術が自然と身に付いていて、「又始まった」と冷めた目で見ていました。

子供は邪悪なものを直感的に見破る能力を備えていると言われていますが、私の場合、そんな素養、育った環境がそうさせたんだと思います。

何せ私の育った環境が良かった。いや、実は全く逆なんです。家の前には割烹旅館、隣はバーときていますから夜は酔っぱらいで騒がしく大変でした。その上、隣のバーには十八、九のホステスが三人ぐらい働いていたんですが、お袋の留守を見計らっては買い物に来て、「ジュースちょうだい」「ミカンちょうだい」「チリ紙、綿花」と、私はからかわれているのか誘惑されているのか分かりませんでした。

家には真面目な人たちも来ていましたが、私から見たらヤクザ紛いの人も出入りをしていたので育った環境は最悪でした。それで母子家庭なのですから、私がこうして真面目な人間で、しかも札幌で市議会議員をしていることは、昔から私を知っている津軽の人達から見れば不思議なことのようです。

でも私には自分が真人間でいることには何の不思議もなく、当り前のことだと思っているんです。その理由の第一は、変な人間になったらお袋が悲しむということです。お袋が悲しむことは私には一番耐え難いことでした。二番目には、弁論をやり論陣を張るには常に考えなければ話になりません。つまり、何が善で何が悪なのか、ことの善し悪しを学んでいるということでもあります。知らず知らずのうちに頭の中にインプットされているんです。悪いことをしたらどうなるか、少なくとも警察の厄介になったり、家に出入りし、ホラを吹いて自己満足しているような人間にだけはなりたくないと思っていました。

だから真人間になることはごく当り前のことで、逆境が役に立ったということでもあります。

二、三年前でしたが、青森県出身の札幌市役所のOBで、自分のふるさとをまだ見て

いないという人達を津軽に案内した折、その人の生まれ故郷の稲垣温泉というところに泊ったんですが、わざわざ私の田舎の奈良町会議員や町役場の幹部だった竹谷さん、消防署長の小山内さんが出掛けて来て歓迎してくれました。その時、「三上が札幌へ行った時、彼は、政治家かヤクザの親分になる男だ」と皆で話していたんだと言われたのにはビックリしました。政治家とヤクザを一緒にするのは妙な組み合わせだと思うのですが、いかにも津軽の人らしい考え方です。

東北地方は後進県が多く中央政府に対しては常に不信感があり、津軽も又、長い間、権力に虐げられてきた思いが強い地域ですから、政治的なものの見方や、この本質とか相手の考えを見抜く力は、人がよくてヌーボーとしているようですが、実際はなかなかのものがあります。

「度胸があって他人の面倒見もよく、何をやるにしても確信犯で、リーダーだったから、万一、道にはずれてヤクザになっても親分だ。苦勞を耐え抜いたら社長か政治家だ」と多少のお世辞も込めて私のことを褒めてくれました。私自身も初めて聞く意外な話でした。同行したOBの人達も「オー」と声を上げ、私を見直したようです。昔なつかしい先輩との話がはずみ、その日は延々と津軽の風土や気質について語り合ったのですが、その時分かったのは、私が考えている以上に、私に対する期待が大きかったことでもあります。

久々に帰ったふるさとでしたが、精神的にリフレッシュでき、大きな自信を与えられた気分になって「もっと札幌のために頑張るぞ。それがふるさとの人達にも喜んでもらえることなんだ」と新たな意欲が湧いたのであります。

さて、話は戻りますが、ふるさとの先輩が言ったような、まとめ役といったことは中学時代から始まっています、生徒会の役員選挙なども私が取り仕切って、生徒会長には今、車力村というところで小学校の校長をしている青山君、議長には現在、埼玉県警で刑事二課長の木村君という具合におのおの候補者を決め、応援演説は私が買って出て全員当選させました。番長まで私が決めましたので、今考えても大したもの

です。

もっとも、番長といっても今でいう番長と違って可愛いもんでした。

私にとって唯一の学生生活も終わりが近づき、進学と就職、地方への残留と進路を決める時期になります。さきほどお話したような事情から、私は進学を断念することになります。

何せ、当時は皆貧乏でしたから、一学年合わせて八十人の中で高校へ行ったのは、同じ地域から三人、全体でたったの七人でした。そのうち大学へ行ったのは校長になった青山君一人です。

後で考えてみたんですが、地域全体が高校へ行かないのは当たり前の感覚でしたから、別に違和感もなく進学しないことを受け入れることが、自然にできたんだと思います。しかし、一方では自分の置かれた環境が違っていたら好きな道に進めるのにという思いもあって、幸福そうな仲のよい親子連れを見ては「自分もあそこの家の子として生まれれば良かった」と他人の家を羨むようなことも度々あり、親孝行の反面、お袋を困らせたりしたこともありました。

季節毎にお袋を襲う喘息の発作も進学断念の大きな原因ですが、地域の貧困が向学心を阻害していたことは否めません。

私は中学卒業と同時に営林署の作業員として、四年間、林木調査や造林の仕事に就くことになります。スナックバーの反対隣には営林署の担当区主任官舎があって、歴代主任の人達とは家族ぐるみの交際があったのでした。十年以上勤めたら公務員になれるということは、働き口の少ない田舎暮らしの者にとっては魅力で、既にそれが良くて私の前に何人かが先輩として働いていました。

営林署の山仕事はそんなにつらいと思ったことはありません。ただ、一生、山仕事のままでもいいのかといった心の葛藤というか、そんな気持ちを常に持っていて、年々膨らんでいったのは事実です。ですから東津軽との郡境にある標高三六八メートルの黒森山の頂上から見かける津軽海峡の連絡船の遠景が、周りの山林や自然とマッチして

いて、何か違う世界を見ているような、心が躍る感動を覚えたこともありました。「自分もあの船に乗って兄のいる北海道へ行ってみたいな。」確かそんな気持ちでした。私は山仕事をしながら、環境が違っていたら高校へも進学できたのに、という屈折した思いの捌け口を、青年団や青年学級活動に求め、あり余るエネルギーの全てをぶつけて頑張りました。

もともと津軽地方は、社会教育活動が活発であったことも私には幸いしました。

弁論では十七才で青年団の県大会で三位になりましたし、自分が推薦した選手の欠場から、マラソンに代理で走って入賞したのをきっかけにマラソンでも活躍しました。青年団の会計に立候補して当選し役員にもなりました。団長が三十才、総務部長が二十五才、会計の私が若冠十七才でありました。

私の出身地中里町は選挙が飯より好きという、津軽選挙の典型的な土地柄ですが、私も未成年でありながら選挙運動に参加して、二十九才で町会議員に立候補した青年団の先輩を当選させておりました。

その他、津軽での生活で印象に残るのは、これも十七才の時でしたが西北五(西津軽、北津軽、五所川原市の三地域を併せた総称)の「歌謡コンクール大会」を吉幾三の出身地の金木町で開催して大成功したことです。

津軽は文学や芸能などの文化活動が盛んな地域で、寺山修二、太宰治や石坂洋次郎、淡谷のり子、高橋竹山、最近では吉幾三、三上寛という歌手や作家など多くの文化人を輩出しております。冬は、地吹雪舞う閉ざされた世界であったので、人々は何か氣勢の上がる「催し」を求める習性が昔からありました。そんなことから人の集まる失業保険の給付日に、給付地で開催したのです。

ストーブ列車や弘南バスなどの交通機関に大々的にポスターを張り、PRしたところ、何と劇場始まって以来の昼も夜も超満員の、大盛況でしたから、お金も大儲けだったのであります。

まるで自分のうっ憤を晴らすかのように張り切った、津軽での生活にもやがて終止符

を打つ時がやって来ました。

十六才上の父違いの兄が、自衛隊の時、鹿追で知り合った女性と結婚して、北海道で暮っていたのですが、結婚に反対だったお袋とは、十年以上も絶縁状態が続いておりました。その兄が札幌で暮しているのが分ったのです。それは私の人生における最初の転機となりました。

私は小さい頃、周りの子供達から「父無し子」とバカにされ何かにつけていじめられ、我慢を強いられて来ました。「こんな時父がいたら、兄がいたら。」そんなふうに絶えず思っていましたので、札幌に兄夫婦が暮していると聞いた瞬間、「兄に会いに札幌へ行く」そう決めました。お袋も反対しませんでした。

昭和三十九年六月十四日、兄夫婦の出迎えを受け私ははじめて札幌駅頭に立っていました。

夢にまで見た札幌はこんなところだったのかと、感激でいっぱいでした。

丁度、札幌祭りの行われている時で、烏帽子ひたたれ姿の平安絵巻の行列に目を見張り、テレビ塔、羊ヶ丘展望台、見るもの、聞くもの初めてですから、物珍しさにキョロキョロしていました。ジンギス汗や「味の三平」での味噌ラーメンに舌鼓みを打ち、こんな美味しい食べ物は世界中捜してもないだろうと思いました。

何よりも気に入ったのは藻岩山へ登った時です。山頂から望む景色は最高でした。

視界は三百六十度、まさに一大パノラマが目の前に広がっていました。眼下には若々しい街が広がり母なる豊平川が流れている。三十分も行けば紺碧の石狩湾、背後には緑豊かな山があって、はるか遠方に美しい山並みが連なる。

私は藻岩山の頂に立ち、心が解き放たれる爽快な解放感を味わっていました。

ふるさとの北津軽で、営林署の作業員として働いていたとしても所詮、自分の将来は見ておりました。「自分は皆とは違う、もっと社会的にも存在感のある仕事や、自分でなければできない仕事をしたい。」次第にそんな気持ちが強くなってきていました。

ゆったりとした、大らかさ、気宇壮大な大陸的風土と調和のある街。これこそが私の求めていた新天地だ、私の生き抜く街だと思ったのです。

札幌の魅力に引き込まれ、身も心も震え、沸き上がる興奮を全身で感じたのです。

「決めた、私は札幌の人になる」

家柄や格式を重んずる風習が未だに残り、これといった産業もない津軽からの脱出に、失うものは何もない私には躊躇することはありませんでした。

むしろ、これでお袋と二人だけの暮しから逃れられる。宿命の呪縛から解放されると思う気持ちが強かったのです。

津軽へ戻った私は、直ぐに、一緒に札幌へ行こうと、渋るお袋の説得にかかりました。

お袋にとっては津軽海峡を渡ることは未知の世界で、外国に行くのと同じ意味を持っており、決心にはかなりの勇気を要したと思うのですが、最終的には私の考えに同意してくれました。

翌年、昭和四十年五月五日、母の五十五才の誕生日が、私が札幌市民としてスタートを切った最初の日であり、私が十九才の時であります。

兄夫婦と一緒に水車町一丁目の小田さんという方の長屋に一年半、その後、福住一条二丁目の中川さんの借家に転居し、私が結婚するまでは私とお袋は兄夫婦と一緒に暮していました。

札幌での仕事は兄と同じタイル工事の仕事で、私は見習い職人として苦しい修行の日々を過ごすことになります。仕事は楽ではなく、あまりの辛さに音をあげ、もう止めようかと思ったことも幾度かありましたが、今止めたらこれまで苦勞したことが水の泡になる。そう自分に言い聞かせ必死にこらえて頑張りました。

札幌へ来て四年目の春、私の人生で二度目の転機が訪れました。

お袋が胃潰瘍で植物園近くの厚生病院に入院したのです。折り悪しく兄嫁も交通事故で入院したため、私が付添いをしました。現在のような完全看護ではなかったのです。来る日も来る日も、病室に赤札のついた重体のお袋の付添いで、私は、希望を失いつ

つありました。

こんなとき不思議なもので、ふるさと津軽のことや、苦しくもあったが楽しかった子供の頃のことが思い出され、それにつけてもこんな時「父親がいてくれたら」と北海道へ来てからあまり行き来のない父親について、「親父は父親の義務を、果たしていない。私は親父を許せない。」という気持ちでいっぱいでした。だから、毎日のように父親の元へ恨みつらみをこめた脅迫状まがいの手紙を出していたのです。

ところが返事は、「自分の道は自分で切り開け、人を当にするな。」そんな内容の手紙と同封されて来たのが、商取引の手形の耳で、「事業をしているとこんなに支払いや借金がある。従って援助の金は一銭もない。」そんな内容でした。

要するに「人に頼るな、自分の未来は自分で切り開け」ということでした。

毎日お袋の付添いで、灰色に汚れた病院の壁と向かい合って考えました。「親父は頼りにはならない」そう思った私は、どんなことがあっても親父を頼るようなことはしない、自分で頑張ると、固く誓いました。

そんな時、病院ではお袋の看護で「オマル」の始末までする私のことが、孝行息子として評判になりました。

私の付添いは二か月ほど続いたのですが、まだ一人前の職人になっていないのに二か月も仕事を休むのは経済的にも大変でした。私に代わって津軽へ嫁いでいた父違いの姉が付添いを一か月してくれたのですが、それでもお袋の喘息は好転せず、いつ発作が起きるか分からないため手術ができないうちでした。

そのうち、胃潰瘍が悪化し医師に呼ばれ病状が告げられました。「このままでは悪くなるばかりなので、手術を五月の連休明けに行う」とのことでした。次いで言われたのは、「手術中に喘息の発作が起きたら生命の保証ができない。もし婚約者がいたら今のうちに会わせておきなさい。」という話でした。

しかし、私は「仕事を覚えなければいつまでたっても一人前の職人として自立できない」と考えて、女っ気のない職場環境で、仕事一筋に頑張ってきましたので時間的な

余裕もなく、恋人や婚約者などいるはずがありません。姉にそのことを話すと、姉の嫁ぎ先の親戚が滝川で経営する「味のアカザワ」という食堂で、五年間の勤めを終え、両親が決めた人と結婚するため津軽へ帰る娘がいるという話を私にしました。姉も津軽に夫や子供が待っており、いつまで経っても手術の目途が立たないので、付添いを切り上げその娘さんと一緒に帰る予定だといいます。

その娘さんの出身地は姉の嫁ぎ先と同じ小泊村で、私より二才年下で、一度も会ったことがありませんでした。

姉の計画は大胆でした。「本当はまだ逢ったこともない相手とは、結婚したくないはずだから可能性は十分だ。第一あんな田舎より札幌で暮らしたいと、前々から話してたから大丈夫だ。帰るその娘さんと結婚してしまえ。」と言うのです。

本当に上手くいくだろうか。

私は姉の話に半信半疑だったが計画を実行するため、まず彼女に会うことになりました。何だかテレビのドラマに似た感じになって来ました。

最初に会ったのは福住の家でした。姉の画策どおり、「お袋の生命は医師からもう駄目だと告げられている。お袋は私の将来を一番心配している。せめて死ぬ前に婚約者を会わせて安心させてやりたい。写真でいいから貸して貰えないだろうか。」私は、初対面の席で緊張と恥ずかしさで顔を赤くしながら一気に話しました。姉との打ち合わせの時より真剣で本気になっていました。

実は、最初に会った時からその娘さんに、松田聖子ではないけれど「ビビビッ」と感じるものがあったのです。要するに一目惚れであります。

相手の娘さんは図々しい私に「初対面なのにズルッコイ人だ」と思ったようですが、第一印象は悪くなかったそうです。同情して成人式の記念写真を貸してくれ、一緒に病院に見舞いにも行ってくれたんです。最初の作戦は大成功でした。

お袋は病人とは思えないくらい喜び、いつの間にこんな相手ができなのかと不思議そうでしたが、私は「とにかく安心して病気を治して欲しい」と話しました。

いよいよその娘さんと姉は津軽へ帰ることになるのですが、とても結婚まで話が進む訳がありません。とうとう自分の車で姉達を津軽まで送って行くことになります。ところがその娘さんには、札幌の東苗穂に嫁いでいる姉がいて、そのご主人も一緒に行くことになりました。多分、私の監視役として急に同行が決まったのだと思います。車の中ではその娘さんは寝てばかりです。全然、話もできません。連絡船に乗ってからも全く同じ状態であります。まるで笑い話ですね。

津軽へ着いて翌日やっと二人っきりで、太宰治の生家のある芦野公園へ花見に出かけることができました。相手の両親が、「二人は恋人同士だ」と早トチリしたのが功を奏したのです。初めてのデートです。

後はよく覚えていないくらい、本気で真剣にプロポーズしました。相手の娘さんも私のことが嫌いではなく、話を聞いて情にほだされたのか結婚を承諾してくれたのです。ところが、その日のうちにお袋の容体が急変し、手術ということになり、翌日、急いで相手の娘さんと義兄の三人が同じ私のポンコツ車で、二日前に来た道を札幌へ帰ることになります。同情した娘さんがお袋の付添いをしてくれるというのです。

娘さんというのは今そこに座っている私の家内であります。

お袋の病気は腸閉塞を併発し再手術をしたのですが、人一倍可愛い息子の嫁になる人の付添いでみるみる病状は好転しました。

ところが今度は付添いをしていた家内が盲腸になり手術を受けます。今までと逆にお袋が看病するような有様で、病院の特別な計らいで一時はお袋と一緒に病室にしていたのですが、これがまた、手術したばかりのお袋が、家内のために世話を焼くことになり、術後の経過が心配ということもあり、又、別々の部屋にされたりとてんやわんやでした。とにかく二人とも全快して退院となりました。

付添いを終えた家内はひとまず田舎に帰ることになります。

何せ田舎へ帰って三日目に、私のお袋の付添いをするために、両親の同意もなく札幌に来ていたのですから両親はカンカンです。当然、和裁など花嫁修業もしなければな

らないということもあって、帰ったのですが、両親はやっぱり田舎での縁談を進めようとしていました。

九月になって私達は、意を決して、駆け落ちをすることにしました。

津軽の姉と示し合わせ、田舎の私の友人にも助けてもらって、出発間際の青函連絡船にやっと駆け込むことができました。「矢切りの渡し」ならぬ「津軽海峡の渡し」でした。

そしてロイヤルホテルで花婿花嫁姿の記念写真だけを撮り、新婚生活がちゃぶ台一つとテレビ一台だけから始まりました。私が二十四才で家内が二十二才のときであります。

新居は、現在、私の月寒東後援会長をお引き受けいただいている藤島会長さんの借家で、そこにお世話になりました。

家内も近くの「いこいストア」の金物店に勤め共稼ぎで頑張ってくれました。

新しい所帯を持った私は兄から独立して「三上タイル」（後の日天タイル工業）という小さな工事店を始め猛烈に働きました。朝五時には家を出、帰りはいつも夜十一時を過ぎ、時には朝方になることも珍しくありませんでした。

お陰で体重は四十八キロに減り、今とは比べものにならないほどスマートで、顔はすっかりこけていました。新生活を裸一貫の無一文からスタートした私達には、とにかく自分の体を使って働くことしか、世間並みの生活を送る手だてはありませんでした。二人で誓ったのは一生懸命働いて、私が三十才になるまで自分の家を持つことでした。それを目標にとにかく頑張りました。働いて、働きづくめで貯めたお金で、二十八才の時、現在の場所に家を持つことができたのです。

家を持つという目標を達成した時、次の目標を決めていなかったため、一時期ボーとなったことを覚えています。二人の新しい生活がスタートした時には、家を持つことが最大の目標でしたが、それはかなり難しく、もしかしたら三十才になっても実現しないのでは、とも思っていたので、二十八才で家を持てたことは私自身が一番驚いて

おり、拍子抜けした感もありました。

その時、目標は高いところに置かなければいけないということを知った気がいたします。

次の目標は「日天タイル工業」を一流の工事会社にする事とした私は、以前にも増して営業にも力を入れ、少しずつですが実績も上がり、職人も十人程抱えるまでになっていました。家内は住込みの職人の弁当づくりなど炊事、洗濯で大忙しでした。

やっと自分達も人並みの暮しができ、今迄、美しく咲いた花を見ても、漠然と見過ごしていたのが、花がとても綺麗に見えるようになりました。ひどいもんです。余裕なんですね。精神的な差なんですね。それだけ無我夢中だったということです。

家を持てたことを、私達夫婦以上に喜んだのはお袋でした。津軽海峡を渡った時の、お袋の心境は私が一番よく知っていました。

友達もない異国とも思える土地で、自分のことはそっちのけで、私のことを心配し、私達の結婚を喜んで見たものの、「ちゃんと生活できるだろうか、仕事は独立したけどお得意さんと上手く行くのか。」などと心配して気苦勞の堪えない毎日だったと思います。

そんな具合ですから、こんなに早く、家を一軒持てるなどとは夢にも思わなかった筈です。それが札幌へ来て九年目で、実現したのですから喜びようも大変なものでした。満面笑みを浮かべるお袋の顔を見た時、私は最高の気分でした。やっと少しは親孝行ができたという、満足感でいっぱいでした。

ところが、好事、魔多しと言いますが、お袋と新居に同居してから二年目の、昭和五十一年十月十一日夜、喘息の発作が起き、大通西十九丁目の夜間救急センターに駆け込んだのですが、手遅れでした。

医師の必死の治療も空しく、お袋は私の胸に抱かれ、目にうっすらと涙を浮かべ、かすかに私の名前を呼びながら満六十六才の生涯を終えました。

私はあまりの突然の出来事に茫然自失の有様でした。「人の一生とはこんなに儚いも

のなのか、人はこんなにも簡単に死んでしまうのか。」葬儀屋さんの車で家路の途中、幼かった頃のお袋との思い出が走馬灯のように駆け巡り、なかなかお袋の死を現実のものとして受け入れることができませんでした。

お袋は幸福の二文字には、縁のない人だったと思います。「もう少し長生きして欲しかった、これからが本当の親孝行ができたのに。」そう思うと、お袋が可哀相でなりませんでしたし、人生の無常、儚さをこれほど感じたことはありませんでした。私は三日三晩泣き通しで、あの時ほど運命を怨んだことはありません。

お袋の死は私の人生での最大の衝撃であり、これまでの二度の衝撃とは比べものにならないほどの痛手を受けました。

私はお袋の霊前に誓いました。

「絶対に頑張っ、北海道一のタイル工事会社になる」

二十四年前のことです。

少年時代、あれだけ熱心だったボランティア活動も、仕事に追われる毎日で、すっかりご無沙汰していましたが、お袋の葬儀を町内会の皆さんにお手伝いいただいたことや、生活に多少ゆとりができたこともあって、町内会のお手伝いから再開することにしました。

そして最初についた役職は青少年部の副部長でした。次に防犯副部長、市の青少年育成委員や民生児童委員、そして町内会長、東月寒中学校PTA会長等、まるでオチョコが盃になってコップへと器が代わるように、次第に責任の重い役職が与えられるようになってきました。

同時に各級の選挙も手伝うようになっていました。大きな転機が訪れたのはこの時です。

前の町村文部科学大臣が初陣の際、豊平区の連合後援会長だったのが元石狩支庁長の新内弥太郎さんという人でしたが、新内さんの要請で私が幹事長に指名されたのです。地元市議会議員の選挙で知り合った間柄でしたが、私の力を買ってくれたということ

です。私がまだ三十七才の時でしたから大抜擢です。

町村代議士は今や文部科学大臣を二度も務め教育改革に取り組む、日本を担う政治家であります。この時のご縁で私は町村代議士の門下生の一人です。

選挙の後も私はヒマがあれば新内さんの家におりました。父親と暮したことの無い私には、新内さんに父親を感じ、甘えもあつてのことでした。ある時、「三上君、君を三年間見てきた、事業家としての才能も十分だが、それよりも君には政治家としての資質の方が上だと思う」そう言って市議選に打って出ることを勧められたのです。私は驚き、考えました。

やっと人並の暮しができるようになったが、いわゆる、地盤、看板、鞆もない自分が選挙に出ても勝ち目はゼロに等しい。第一負けたら元の貧乏生活に戻ってしまう。私は「うーん」と言ったきりしばらく返事ができませんでした。

「私が勝てる見込みがあるのですか」と、新内さんに尋ねると、「勝てる」という返事でした。ただし、親戚も、同級生もいない無名の者が勝つには後援会作りに三年間かかるし、資金も少なからず必要だということです。私は考えさせて欲しいといってその場を失礼し、家内にその話をしたところすぐさま反対されました。どうしても選挙に出るのなら離婚だということです。

人前に出るのが苦手の家内は、選挙に出る人の妻はそれに相応しい女性でなければいけないという考えのようでした。

しばらくそのことを誰にも言わずにいましたが、今度は町村さんの選挙と一緒に戦った若い仲間から、町村直系の市議として選挙に出ることを勧められたのです。

私は、自分のような中学校しか出ていない田舎者を、そんなに熱心に押してくれることに感謝をしながらも戸惑いを覚えました。何故なら、私はみ輿を担ぐ方で、み輿に乗る側になることなど一度も考えたことがなかったからです。

その後、幾度となく新内さんの家で現在の安部連合会長や仲間の何人かで相談するのですが、資金面で私が用意できる金は・が知れています。

結局足りない分は新内さんが工面するというので、私は出馬を決意したのであります。

仕事のお得意さんは、止めた方がいいという人もおりましたが、大方は割と好意的でした。それからというものは、一日の七割は選挙活動でした。新内さんが付きっきりでした。

新内さんは、元副知事で衆議院議員だった安田貴六さんや元参議院議員の西田信一さんの参謀で知られた人でしたが、市議などの地方議員の選挙をあれだけ熱心に取り組んだのは初めてだったそうです。新内さんが言うには「安田さんの選挙でもこんなにやったことはない。やはり君を市議会議員にするのは至難の業だな」とつぶやいていましたが、それだけ真剣に力を注いでいただいたということでもあります。

ところが、一年半ほど活動を続けていたとき、試練はやってきました。

統一地方選挙を翌年に控えた昭和六十一年の夏、ペースメーカーの取替えで入院していた新内さんが退院を目前に脳梗塞で倒れ、意識不明となられてしまったのです。

私は目の前が真っ暗になってしまいました。

正に支柱を失ってしまったのです。

でも、もう後戻りはできませんし、途中で止めるわけにもいきませんでした。仲間にも助けられ、支えられ最後まで戦ったのです。もの言えぬ新内さんに勝利を報告したい一心でした。

結果は七六六三票で落選でした。

傷心の家内とともに選挙事務所へ向かったのですが、負けた選挙と思えないぐらい、人と熱気であふれていました。「本当は勝ったのでは」そう思えるぐらいの雰囲気でした。

詫げる私へ「もう一度やろう、これで止めたら男でない、皆んなで頑張ろう」という励ましと雪辱を誓う大合唱だったのです。

私も秘かに心中に期するものがありましたが、さすがに口に出すことはできませんでした。

寝返りを打ち、一睡もできなかった翌日、家内のほうから、「あれだけの支持者の方々が、もう一度戦うべきだと言ってくれるのだからもう一度やってみませんか、そのためには自分はどんな我慢もする。」そんな言葉を口にしたのです。

絶対反対、選挙に出るなら離婚とまで言った人とは思えないくらい真剣でした。

私は今それを言う時期ではない。とにかく働いて資金を作るしか方法がないことを家内に言い聞かせました。

実際、銀行にも借金が残っていましたし、新内さんが倒れてしまったことで当てにしていたお金も駄目になり、とにかく資金手当が第一でした。

選挙に金が掛るということは、誰かにお金を運動資金として渡すとかでなく、事務所経費やパンフレット印刷代や、郵便代に掛ってしまうということです。

私は三年振り再びヘルメットに地下足袋姿で、工事現場で職人と一緒になって働き始めていました。

私が懸命に働く姿を見た従業員も奮起して、以前にも増して仕事に熱心に取り組んでくれたのであります。選挙に出馬した為に、社業がおろそかになり業績が下がっていたのですが、お陰で一挙に挽回して信用を回復することができたのです。

私にとっては、人生最大の試練の時でありました。

選挙で敗れ、会社の業績が振るわないとなれば、お先真暗で大抵の場合「倒産」であります。

本当にあの時は私にとっての正念場だったと今でもそう思っております。「まず、働いて選挙資金を稼がねばならない。」と考え私は全力で仕事に励みました。それが勝利への唯一の道と信じ、私は一心不乱に働き続けたのであります。正に「一念岩をも通す」の思いでありました。

そして、奇跡が起きたのであります。会社の業績はみるみるうちに上がりました。資

金を手にした私は再び、戦いに駒を進めることができたのです。後援会の皆さんもパワー全開でありました。

そして結果は一二、〇〇二票の大勝利でした。

こうして私は念願の市議会議員の席を手にしたのですが、議員になったのは本日おいでの皆様や支持者の方々のお陰であります。そしてあの時、新内さんとの出会いがなかったら選挙に出るなど考えも及ばないことでした。正に運命を感じずにはられません。

さきほどもお話しましたが、新内さんは私のことを実の息子のように思ってくれました。無学な私を書店に連れて行き広辞苑を買ってくれたのにはビックリしました。又、議員必携を読むようにも言われました。まだ議員になる前のことです。勉強しろということです。

とにかくいろんな本を読むよう勧めてくれたのが新内さんでした。それから「議員になったら弱者に七割の比重を置け」と言われたことも忘れられない言葉です。

まだ議員になる前から、そんなふうに手取り足取り指導していただきました。

お陰様でこの四月でまる十年になりました。偏に皆様のご支援の賜でして、この場をお借りして厚くお礼申し上げる次第です。

さて、私は前述のように日天タイル工業という会社を興し、社長を務めてまいりました。しかし、札幌のような大都市の議員になって見て、会社経営と議員活動の両立は容易ではないことを思い知らされました。

このまま会社経営にかかわりながら、市議会議員として活動することは、どちらも駄目にしてしまう恐れがあると考え、札幌市の議員としての活動に専念し、私を選んでくれた人たちのために働くことを決意しました。

創業時から社長であった日天タイル工業には人一倍の愛着もあり、会社を手放すことは断腸の思いでしたが、長年ご厚誼をいただいた方々に事情をお話して、会社の将来と社員のためにも、平成七年九月に、私の良き理解者でありお得意様であった方に、

会社の経営をお引き受けいただきました。

従って、現在はさびしい気もしますが、会社とは全く縁のない者となっております。さて、私は落選中、ある人から中村天風師の本を戴きました。「成功の実現」という本ですがこれを読めというんです。

読んで見ましたら非常におもしろく読めるんです。精神統一法を編み出した人で、本名を中村三郎といいまして、一九六八年（昭和四十三年）に九十二才でお亡くなりになっております。お父さんは九州柳川藩の一門の出で、大蔵省の抄紙部長、今の印刷局長だと思っておりますがそんな要職にあった方であります。

お父さんが大蔵省の要人ですからいろんな外国人との交流があるのですが、特にイギリス人夫妻にかわいがられ英会話を身につけることができたそうです。子供の頃から腕力に自信のあった天風師は、親族で農商務省の次官をしていた前田男爵の紹介で、右翼の大立者の頭山満翁の玄洋社に預けられ、その気性の激しさから「玄洋社の豹」と渾名されるくらいの人物であります。

一八九二年（明治二十五年）、十六才の時、陸軍中佐で軍事探偵の河野という人のカバン持ちで、日清戦争開戦前の満州方面の偵察、調査に従っております。要するにスパイであります。

その間、約一年で中国語を修得しています。

学習院に入学しますがすぐ中退して、一九〇二年（明治三十五年）今から百年前、二十六才で参謀本部のスパイとして採用され特殊訓練の後、満州に潜入すること三年、九死に一生を得て日本に生還するのであります。スパイに選抜された屈強百十三名のうち帰れたのは、わずか九名だったといいますから、大変な強運の持ち主です。帰国後、現在の日清製粉の社長も務めております。

強靱な肉体の持ち主でしたが、一九〇六年（明治三十九年）三十才で肺結核を発病して死に直面することになります。当時、結核に関する最高権威と言われた北里博士の治療を受けても好転せず、医学、宗教、哲学、心理学の書を読み漁っております。

私も宗教、哲学、易学、心理学の本を読んでいます、医学書だけは読んでおりません。

それは別として、天風師は「座して死を待つよりも」と救いの道を求め、三十才の時に身分を偽り、病身をおして、アメリカへ渡り、その後、イギリス、フランス、ドイツと、当時、世界一といわれる医学者、哲学者、ありとあらゆる高名な人に会い指導を受けるのですが、遂に得るものがなく、帰国を決意し、途中、立ち寄ったカイロのホテルで、偶然、ヨガの大聖人カリアップーに出会います。

天風師が最初に驚いたのは、ホテルで二人のインディアンに大きな団扇で煽がせ、アブミみたいなハエを追わせていたカリアップーが、エッと気合を入れて指さすと、ハエが地面に落ちたというのですから宮本武蔵以上であります。

すっかり魅入った中村天風師、カリアップーに連れられてヒマラヤ山脈のふもと、ゴーク村というところで二年数か月修行を続け、「悟入転生」(真理を悟り、生まれ変わる)の新天地を切り拓き、日本人初のヨガの直伝者となります。

天風師がカリアップーに初めて会ったとき、「人間この世に何をしに生まれてきたか、考えたことがあるか。」と問われたが、即座には答えられなかったそうです。何日かして、「人間この世に、宇宙本来の面目である進化と向上に順応するべく出て来たと思う」と答え、弟子になることができたそうですが、凡人ではなかなかこうは答えられないと思います。

一九六八年(昭和四十三年)に九十二才で天風師はお亡くなりになっておりますが、この間に「天風会」を作り、ヨガと精神統一法を普及させるんですが、会員には原敬、東郷平八郎、山本五十六、尾崎行雄、杉浦重剛等々、著名人がキラ星のように並び、会員数は累計で百万人を越えるというから大変なもんです。

本日、私がどうして中村天風師の話をしたかといいますと、実はこの本には人生を生き抜く上での必要なことが、すべて網羅されていると言っても過言ではなく、実にためになることが書かれているんです。それも退屈させない面白さのある本です。

私自身もこの本によって随分と勇気づけられ、励まされ、再び挑戦する際の支えになったからであります。

時間があればもっと詳しくお話したいのですが、あとは皆さんも是非、機会を見つけ「成功の実現」をお読みいただければと思います。

さて、私が薫陶をうけた新内弥太郎さんは、私に本を読むことを勧めましたが、お陰でいろんな本を読むことが出来ました。なかでも私が好んで読んだのは、どういうわけか東洋思想の本で、その系統に集中しました。他に、西谷啓治先生の著作集も持っているのですが難しく途中で止めております。

安岡正篤先生の本は自分に合うのか、いつの間にか吸い込まれて読んでしまいます。

安岡先生は、明治三十一年（一八九八年）大阪市に生まれております。

幼少の頃から四書五経に親しみ、中学生の頃、王陽明に傾倒、東京帝国大学法学部政治学科卒業と同時に、「王陽明研究」を著して、一躍脚光を浴びました。

王陽明とは、中国、明の時代の儒学者で、当時、中国思想界の体制的教學であった、朱子学に対抗、明代の社会的現実に即応する理をうち立てた、新思想家であります。

安岡先生は、以後、陽明学者として知られるようになりました。

昭和二年「金鶏学院」を開校しますが、これは儒学を中心とする東洋思想を活用して、地域振興に役立つ有徳の人物養成を目指すもので、当時のジャーナリズムは、・昭和の松下村塾・と称したほどです。

次いで、昭和六年には、農村の次代のリーダー養成ということに目的を純化させて、

「日本農士学校」を開校。昭和十九年には大東亜省顧問に就任しております。

後に、終戦の枢機にまで関わり、「終戦の詔勅」草案に、加筆したことは有名であります。

戦後は、吉田元首相から師と慕われるなど、以後、・歴代総理の指南役・と言われております。

安岡先生の学問は、陽明学にとどまらず、朱子学、老荘、易学、仏教、神道などの東

洋思想と政治哲学、人物研究、更には西洋思想にも通じ、その学問は洋の東西を問わず、広く、深く及んでおります。そして、その学問の目的は「人間いかに生きるべきか」「リーダーはいかにあるべきか」を探究する生きた学問であり、古今東西の偉人哲人の教えや生きざま、古典を現代に活かす「活学」が目的でした。

安岡先生は、昭和五八年に八六年の生涯を終えられたのですがまさに、偉大と呼ぶに相応しいご生涯であったと思います。

「平成」の元号は、安岡先生の考案であることが、後に、竹下元首相によって明らかになっております。

その他、国維会、師友会を設立するなど、政財界リーダーの啓発、教化、あるいは広く国民各層に影響を及ぼした安岡先生の人間学は、現在でも多くの人々の精神的支柱となっており、関西師友会を中心に、全国各地で教学が続けられております。

その安岡先生が昭和五十二年に出された「運命と立命」一陰・録の研究一という著書があります。人生には、宿命、運命、立命がある。いかにして人生を立命となすか。その極意を説いたのが「陰・録」であります。

この本は、中国明の時代の袁了凡という学者が息子の天啓に書き残した家訓とも言うべきものであり、安岡先生が原文を分かり易く解説したものであります。私も、三十五才のときに読んで非常に感銘を受けたことを覚えております。

私の人生において、自らを奮い立たせるきっかけになった本で、平成十年二月十七日、月寒公民館での講演でもお話をさせていただきましたが、もう一度、ご紹介させていただきたいと思います。

陰・録とは、「書経の惟れ天下、民を陰・す」ということから出ている熟語であります。陰は冥々の作用、・はさだめられるという文字であり、陰・とは、自然の支配する法則にそって、人間の探究によって得た法則に従って自らを変化させてゆくという意味であります。

著者の袁了凡は明の世宗から神宗の時代の人であり、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折には、

中国から援軍に加わり参戦しております。後に学者として名をなした実在の人物であります。

彼は、代々、医者の家系に生を受けるも、時代の変遷とともに家も衰え、早く父を失ったこともあり、少年時代は貧乏であったそうです。女手ひとつで育てられた了凡は、母から医者になることを奨められ、専ら医学を学んでおりました。

そんなある時、近くのお寺の境内で、孔という一人の老翁に出会います。

瓢々として仙人のような頬髭の長い偉大な風貌の老翁に了凡は思わず敬礼をしてしまいます。すると、その老翁は「君は、仕途（官吏になること）即ち、役人生活をする人であり、来年の科挙（中国の官吏登用試験）に臨む運命にある。どうしてその道の学問をしないのか。」と問われます。

そこで了凡は、自分が医者の道を目指して勉学に励んでいる経緯を話し、「ところで貴方はどちら様ですか？」と聞いたところ、「自分は孔といい、雲南人である。」と答えます。

ちなみに中国の雲南地方は、日本人のルーツの一つと言われているところです。

「邵康節の皇極経世に関する学問の正伝を得たが、その理法を悉くお前さんに伝えたいと思って、遠路はるばる尋ねて来たところだ、どこか宿泊するところはないだろうか。」と言われます。

邵康節は、張横渠・周茂叔・程明道・程伊川と並んで宋初の五人の高名な学者の一人であります。

かの有名な「万世の為に太平を開く」という一句は、張横渠の言葉ですが、「天地の為に心を立て、生民の為に道を立て、往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く」という件の最後の一句であります。

その張横渠と並び称せられる邵康節の「皇極経世書」とは、人類の栄枯盛衰を説いたもので、世を治める命数の学問であります。皇極の「皇」とは、大いなるとか、究意とかいう意味で、「皇極」とは絶対極致、太極と同じ意味ですから、その太極に関す

る興亡、榮枯盛衰の原理、原則を説いているものであります。

この邵康節の「皇極経世書」の正伝を伝える為に、はるばる遠方から来たというのです。これは大変なことです。

そこで、老翁を自分の家へ案内し、母に事情を話すと、「よく接待しなさい」ということになって、その晩、了凡の家に泊まります。

そして、了凡の数を占います。数とは因果の関係、運命であります。いろいろと運命を占ってもらったところ、些細なことでも悉く、皆、当たったのであります。了凡はすっかりこの老翁に引き込まれます。「よし、科挙を受けよう。」

遂に、受験勉強をする決心をするとともに、先々の自分の人生に起こる幸、不幸を占ってもらいます。

老翁のいうのには、「某年の試験には何番目で合格し、某年には廩生となって禄米を貰うようになり、某年には貢生となって給料を貰うようになる」と予告されます。

県、府、道の三度の予備試験に及第して初めて本試験が受けられるのですが、中国ではこれを秀才といいまして、秀才になると、廩生、貢生という二つの特典が得られるのです。

廩とは倉の意味で倉米、俸禄がつくことで、貢とは給料を貰うことであります。

こうして自分の一生を占ってもらって了凡の人生は、実際にその通りになっていくのです。

しかし、皆さん、こんなことがあるのでしょうか。果たして、そのことが覆る時がやってきます。

了凡が同僚と研修のため、南京の棲霞山に雲谷禅師を尋ねたとき、あまりにも超然として、達観したような了凡の態度に、「これは大変な人物だ」と対面した雲谷禅師は最初に思います。

そして、「どうしてそんなに超然としてられるのか？」と尋ねると、・斯く斯くしかじか・で、私の運命は決まっています。これまでも占いの通りになっており、四十代

で地方長官になれるとも言われております。そして子供は出来ず、五十三才の八月十四日丑の刻（午前二時）自宅の畳の上で死ぬことになっているのです。」と言い、「人間は進むも退くも出世の早い遅いもすべて運命で決まっているのだから、いくらやきもきしてもなるようにしかならぬのだと固く信じるようになり、ああしたいこうしたいというような意欲をすっかりなくしてしまいました。」と言うのです。

実は超然としていたように見えたのは、達観でもなんでもなく宿命感の虜になっていただけで、すっかり人生をあきらめていたのであります。

勿論、これは本当の悟りではありません。

これには雲谷禪師もあきれてしまい、「なんだそうであったのか、了凡よ、それは間違った考えだよ！」と、雲谷禪師に懇々と諭されます。

本来、易学、運命学は自然に順応し、変わる世界に易てゆくという学問ですが、大衆化されるに従って通俗化してしまい、間違った（曲解）方向へと進みます。

日本でも易の研究が進むにつれて次第に大衆化し、その学問的、歴史的意義というのが専門家の中に埋没してしまい、単に「当る、当らない」という予言的な興味のみで通俗化してしまいました。

孔という老人も易学にはかなり精通した人ではありましたが、誤った考えで運命学、易学を理解していたのであります。

雲谷禪師の教えを受けた了凡は、ハット我に返るのであります。

この後、人生に対する考えを改め、何事にも意欲を持って臨むようになっていきます。すると予言は当らなくなり、子供は出来ないと言われていたのですが、天啓という子供にも恵まれ、五十三才の八月十四日の丑の刻（午前二時）になっても死ななかつたし、後に学者になって立派な人生を送り、中国の発展に多大な貢献をしております。雲谷禪師の教えによって人生を開眼した了凡は、その後、息子天啓に。

『私は、お前（天啓）の運命がいかなるものであるかまだわからない。しかし、お前が大変な出世をして有名になったならば、その時はまだ昔の志を得ぬ時の、落魄して

おったときの、気持ちを持ち続けて、決して好い気になってはいけない。もし、自分の思いどおりの運命に当たったならば、まだ、昔の意のままにならなかった時の心を持たなければならない。もし、少し豊かになり衣食に事欠かぬようになったならば、貧乏な時の気持ちを忘れてはならない。また、お互いに愛敬し合うようになったならば、いい気になって甘えないように、常に反省して慎むことを忘れてはならない。もし、家が代々世間の人望を集めるようになったならば、身分が卑しくて人から顧みられなかった時のことを忘れてはならない。もし、学问がやや優れるようになったならば、まだまだ浅学固陋で何もわからぬ自分であるという気持ちを失ってはならない。遠く祖宗の徳を揚げようと思ったならば、まず自分に一番近い父母の過ちを覆い消すことを考えよ。上、国の恩に報いようと思ったならば、先ず下、自分の家の福をつくることを考えよ。外の人を急を救わんと思えば、まず、内に自分の邪念を防ぐことを考えよ、そして、日々に自分の非を知り、日々に過ちを改めることが肝要である。一日自分の非を知らなければ、一日自分を是として安心してしまう。一日何の過ちを改めることがないというのは、とりもなおさず、一日何の進歩もないということである。天下に聡明俊秀の人物は決して少なくない。けれども徳が広まらないのは、ただ、漠然と日々を送るからであって、うかうかと言葉に身をやつし折角の一生を無為にしてしまうからである。

雲谷禪師が授けてくれた立命の説は、至って精しく、至って深く、至って真実、至って正しい道理である。それ天啓よ、習熟玩味して勉めてこれを実行し、自らを空しくすることがあってはならない……………」

只今申し上げた一節は、「陰・録」第一章の第七段、「子孫に教う」の部分であります。この他、積善、道理と内容は続くのでありますが、全体を貫くのは「運命は自らの道徳的努力によって転換していけるということ。謙虚、積善、改過という道徳的精進によって道は拓ける。」という教えであります。

この教えによって悟りを開いた袁了凡は、息子天啓に書き残したのが「陰・録」であ

ります。

雲谷禅師の教えによって、ハッと我に返る了凡であります。私、三上洋右もこれを読み進むうち、大変な感銘と影響を受けた一人であります。齢まさに三十五才であります。

その頃の私は、人生に対する確固たる信念もなく、自己流の人生観しか持ちえなかったのですが、この一冊の本で、了凡以上に衝撃を受け、目を覚まされたのであります。

『安心と立命』一陰・録の研究」と題されたこの本は、元々、安岡先生の関西師友協会先哲講座での講義録をまとめたものですが、その後、「陰・録を読む」と改題し、致知出版社から出されておりますので、是非皆さんにご一読いただきたくご推薦する次第であります。

その他、私が影響を受けたのは熊崎健翁という姓名学者ですが、二部の「姓名と生命の神秘」でお話をさせていただきたいと思っております。

人生において、大勢の方々との出会いがありますが、私もたくさんの皆さんとの出会いによって今日があります。皆さんをはじめお世話になっている人は数えきれないほどです。

実の父親ではないのに、実の父親以上に私に力を注いでくれた新内さんのお陰で教養のなかった私は、少しは人並みの知識を得ることができ、「人生とは運命とは」と真剣に、そして前向きに考えられるようになり、今日に至ることができた心から、その慈愛に満ちた教えに今でも感謝をしております。

東洋思想の本家本元は中国ですが、その中国の諺に「人間万事塞翁が馬」という言葉があります。

人生の幸せも不幸せも予想がつかないことを言うのですが、昔、辺境の塞近くに住む翁（男の老人）の馬が逃げてしまい、人々が悲しがったところ、翁は「これは良いことになるかもしれない」と言い、後日その馬が駿馬を連れて帰ったので人々が喜ぶと、翁は今度は「何か悪いことが起こるかもしれない」と言ったのです。すると不幸なこ

とに翁の息子が落馬し、足が悪くなってしまった。すると翁は「また何か良いことがあるかもしれない」と言ったんですね。なんと今度は戦争が起こり、健康な若者はみな兵士に連れて行かれたのですが、翁の息子は足の悪いことが幸いして、徴兵を免れたという故事からきている言葉ですが、人生何が幸いするか全く予測のつかないものであります。

私の場合も、家庭や環境に恵まれなかったことが逆に良かったのかもしれませんが。

いつもご指導いただいている町村前文部科学大臣は私より一つ年上で、以前、逮捕された日本赤軍の重信房子は同じ年齢です。もし私が大学へ入っていたら、自分の性格からして反骨精神が旺盛でしたから学生運動に夢中になったと思います。もしかしたら日本赤軍に入っていたかもしれません。そうなりますと、私は今、町村門下ですが、当時、反全学連の議長として東大紛争を収めた町村代議士とは敵対関係になっていますし、よど号事件で北朝鮮に行っていたかも分かりません。あるいは浅間山荘事件で露と消えていたか、リンチ事件で殺されていたかも分からないのです。

そう思うと、初戦で敗北したのも良かったのかも分かりません。最初から当選しても人間ができていれば別ですが、人情の機微に触れることなく、冷酷な人間になっていたかも知れません。

「人間万事塞翁が馬」いい言葉ですね。

さて、二十一世紀を迎えましたが、今の時代、百歳まで生きるのも夢でなくなりました。

私は、安岡正篤先生の教学を学習する北海道師友会の会員であります。先日、教を学ぶ照心講座に出席しました。大麻高校の初代校長を勤めた上田三三生先生が理事長で、講師なんですが、そこでの話を今日は是非、皆さんに伝えたいと思いますので紹介させていただきます。

その勉強会では平成四年に九十七才でお亡くなりになった、哲学者の森信三先生の「いのちの呼応」の中の「人間の一生」を学習したのですがその一節を読みます。

人間の一生

職業には上下もなければ貴賤（身分の上下）もない。世の為、人の為に役立つことなら、何をしようと自由である。

しかし、どうせやるなら覚悟をきめて十年やる。すると二十からでも三十までにはひと仕事できるものである。それから十年本気でやる。

すると四十までに頭をあげるものだが、それでいい気にならずにまた十年頑張る。すると、五十までに群を抜く。しかし五十の声をきいた時には、大抵のものが息をぬくが、それがいけない。

「これからが仕上げだ」と、新しい気持ちでまた十年頑張る。すると六十ともなれば、もう相当に実を結ぶだろう。だが、月並みの人間はこの辺で楽隠居がしたくなるが、それから十年頑張る。

すると七十の祝いは盛んにやってもらえるだろう。しかし、それからまた十年頑張る。するとこのコースが一生で一番おもしろい。

「人生二度なし」これ人生における最大最深の真理なり。

と森信三先生は言っているんですが、なかなか味わい深い言葉でないかと思います。この言葉が述べられたのは、随分前のことですから、今でしたら八十才からのコースが一番おもしろいということになります。

この他に、感動を受けるには、一、師を求める。二、書物を読み実践する。三、すぐれた芸術品に接すること。この三つが不可欠の条件だとも言っております。

つまり、二度ない人生なのだから、どんな仕事であっても人に役立つことを目標にして、一生懸命に生きなければいけないんだということでもあります。

NHKのテレビ番組「プロジェクトX挑戦者たち」は、私が好きで楽しみにしている番組の一つで、いつも感動と感銘を受けます。周りの方々に聞いてみますと私一人で

ないようです。

あの番組が共感を受けるのは、「運命は努力している人を裏切らない。必ず道は開ける。」という一貫したテーマがあるからであり、登場人物たちの生きざまを参考にし、視聴者に一緒に考えてほしいという姿勢があるからであります。

実際、視聴者からは放送後に「力が湧いた」「元気が出た」と反響が寄せられているそうです。

私たちは、この世に生きる意義を知ることによって、自分がいかに人生を生きているかを知るのではないのでしょうか。

人生とは、希望を持って生きることによって満足を得る。そう教えていると思うのです。

サミエルウルマンは、「青春とは人生のある一定の期間をいうのではなく、その時々々の心の様相をいうのだ」と言っております。つまり、自分自身の気持ちが若ければ、年齢には関係ないということでもあります。

そして、人生楽しく長生きするには、何でもいいから社会に役立つ、何かに参加するという気持ちが大切だと思います。たとえば、晴峰会とか、私の後援会に本日のように、出席することもその一つであります。これからも是非、参加して下さい。

運命とは

本日は「人生と運命」をテーマにお話をしてきましたが、最初述べたように、人生とは人間が活着している間であって、人間がこの世に生きて行くことでもあります。

そして、「宿命」は生れる前から定められていて、どうにもならない「運命」を言います。

そして、「運命」とは人間の行動や、運不運を支配する大きな力であります。

その「運命」であります但し努力によって変えられるということでもあります。「運命」という字は命を運ぶと書きますが、命とは自分の生命であり、自分自身のことであります。運ぶに込められた意味は深く、動く、移動する、変化するという意味が含まれ

ています。

もう一つの意味は、運という字には軍が走るという意味があるということです。軍が走るとは戦いを意味しております。

誰と戦うのかと申しますと、自分自身と戦うということでもあります。

即ち、「運命とは自分との戦いによって変わるということ、人生は自分との戦いに打ち克つことによって如何ようにも切り開くことができるということ。」なのであります。

私が本日、皆さんに一番お話したかったことはこのことでもあります。ですから、今までお話した「私の半生記」については全部忘れていただいて結構ですが、このことだけは覚えていって下さい。

人生というものは、どんなに貧乏しても、どんなに苦しく、辛いことがあっても諦めてはいけない。どんな困難なことであっても、希望を捨ててはいけない、勇気を持ってそれに立ち向かっていけば、道は開けるんだということを強調したかったのであります。

人間、努力をすれば必ず人に認められ、報われる時が来るんだということでもあります。私は今、少年時代に、私たち母子を逆境にさらした父親を憎んだことや、札幌へ来てから母親の看病で、薄暗い病室の壁と向き合う絶望的な生活の中で、毎日のように父親に対して、恨みつらみを手紙に書いたことなどが、懐かしく思い出すことができるようになりました。

月日であります。月日の経過が気持ちを和らげ、色々な思いを洗い流してくれるということでもあります。

きっとあの時、仕送りや援助を受けていたら、今の私はなかったのではないかとも考えます。

ライオンは子供を親離れさせる時、断崖から突き落とすという話がありますが、私を自立させる為にわざと冷たくした、そんな親心なんだと善意に解釈することができる

ようになってきました。不思議なものであります。それは、切りたくても切れない血でつながった親子という「宿命」故なのかも知れません。

その父も齢、九十才となりました。村役場に勤める孫が面倒を見ていますが、今も、元気で車の運転もしております。

いつまでもというわけにはいきませんが、生きられる限り生き続けてほしいと願っております。

以上で「人生と運命」のお話を終わりますが、長時間に渡ってのご清聴に心から感謝を申し上げますとともに、第二部の「姓名と生命の神秘」も是非お聴きいただければと存じます。

今後とも、力強いご支援を賜りますようお願いを申し上げ、ご挨拶に代えさせていただきます。

ありがとうございました。